



**FIRST LANGUAGE JAPANESE**

**0507/02**

Paper 2 Reading and Directed Writing

**May/June 2007**

**2 hours 15 minutes**

Candidates answer on the enclosed Answer Booklet

No Additional Materials are required.

**READ THESE INSTRUCTIONS FIRST**

Write your Centre number, candidate number and name on all the work you hand in.

Write in dark blue or black pen.

Do not use staples, paper clips, highlighters, glue or correction fluid.

Answer **all** questions.

At the end of the examination, fasten all your work securely together.

The number of marks is given in brackets [ ] at the end of each question or part question.



**受験生への諸注意**

解答用紙の表紙にある指示に従いなさい。

提出物全て（解答用紙、その他）に、センター番号・受験番号・氏名を記入しなさい。

解答は、解答用紙の解答欄に記入しなさい。その際、黒または濃い青色のペンを必ず使用すること。

ホッチキス（ステープラー）やペーパークリップ、蛍光ペン、のり、および修正ペンなどの使用禁止。

**受験生への補足説明**

すべての問題に答えなさい。

試験終了時には全ての提出物をまとめ、必要によっては配布されたひもなどでくくりなさい。

配点は各設問の最後にある[ ]内に示されています。

This document consists of **7** printed pages, **1** blank page and **1** inserted Answer Booklet.



## パート1

次の【A】と【B】、二つの文章を読んで、後の問1と問2に答えなさい。

### 【A】

約10年前、「地球家族」(ピーター・メンツェル著)という面白い本が出版された。世界30カ国の、ごく平均的な家族の持ち物を家の前に全部出してもらい、それを背景に写した家族写真集で、その国の暮らしがよく現れている。圧巻は日本の家族だった。小ぶりな2階建ての家に、これほどのモノが入るのかと笑いを誘うくらい膨大な量の家財が積み上げられている。しかも他国と比べ、無機質な工業製品が多い。世界のみんなが驚いたと思う。

ここまでモノに執着してきた日本人とは一体何なんだろう。あらためて考えると、思いは、「焦土」に行き着いた。大空襲と原爆。焦土の中の、衣食住の圧倒的な欠落。戦後の日本は、その「モノ・トラウマ(trauma)」を抱え込んで出発した。そこへ追い討ちをかけるように、1950年代アメリカの物質文明がなだれ込む。

そんな状況を身をもって体験したのが北九州を襲った昭和28年(1953年)の大水害だった。アメリカの子供たちから救援物資が送られてきた。段ボール箱を開けると玉手箱のようだった。いろいろな物が入っていたが、その中に、白とピンク、2色のプラスチック製で飛行機の形をした鉛筆削りがあった。まるで夢の世界を見ているようだった。だがあれほど感動したのに、それをどう使い、いつ失ったのか、不思議なことに記憶が飛んでしまっている。

1980年代末にアメリカを旅して、あのかつての不思議な出来事が何だったのか、わかった。アメリカの生活製品というものは初期効果によるインパクトは強いが、すぐ忘れ去られるような仕掛けというか、宿命を持っている。つまり、捨てさせるための大量生産品なのだ。古いものを大切にリサイクルするのではなく、使い捨てのサイクルによって市場が成り立っている。家財や持ち物を未練なく捨てられるというのは、日本人の感性では考えられない生活行動だった。元来日本人には、モノには自分の思いや秘めたる家族の歴史がこもっている、というアニミズム的感性が色濃く存在した。

戦後60年、やがてあのアメリカのモノ感性と同じ感性が「フリーマーケット」という形で日本にも再現される。それは、ヒトの思いがこもらないモノたちの消費サイクルの中に僕たちが投げ込まれている、ということの現われでもある。帰るところ、あの「地球家族」にあった1枚の証明写真となる。そこに見られるのは、戦後の日本人にとってモノや家を獲得することが、幸福論の骨格だったということだ。

だが、イエ、モノを追い続けて、家族や人間関係が置き去りにされ、家族の不和、いじめ、家庭内および校内暴力も深刻化している。こういった関係の衰弱は、若者言語にも現れている。彼らの言葉や歌の歌詞は、たとえば平成の国民歌謡のようになった「世界で一つだけの花」のように、「愛」や「幸福」といったポジティブ言語の語彙が薄っぺらだ。逆に若者向けのインターネット・サイトで使われているような「憎しみ」や「恨み」、「中傷」といったネガティブ言語の語彙に妙にリアリティーと厚みがある。

しかし、<sup>りょうじんひしやう</sup>梁塵秘抄\*の「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけむ 遊ぶ子どもの声聞けば 我が身さえこそ揺るがるれ」という言葉にもあるように、元来日本人はもっと肩の力をぬいて、おっとり遊ぶことのできる民族だったように思う。モノではなく「生きることを楽しむ」幸福論を、日本人は持っていた。帰るべき場所はなくてはならない。

\*梁塵秘抄 12世紀の今様歌謡集。後白河法皇が編者。

## [B]

日本の戦後 60 年を幸福という観点から振り返るとき、興味深い時期が一つある。1960 年代前半だ。それは、大衆が幸福感に満ちていた時代だった。革命や終戦や独立の直後でもないのにこれほど幸福感が共有された時代は、世界史的に見ても異例だと思う。なぜ幸福の時代だったのか。

理由はいろいろあるが、第一に戦後の窮乏期が終わり、人々が衣食住の最低限の基盤を得られたことが挙げられよう。第二に、貧困の記憶がいまだ鮮明だったこと。第三は低階層の人々に収入が渡り、階層が平準化されたこと。そして第四は「消費資本主義」が成立したことだ。

一般的に、資本主義での恐慌を防ぐには戦争か公共事業によって需要を作り出すしかないと言われてきた。しかし、消費資本主義は違うアプローチを取る。広告や情報提供によって消費欲をかきたて、需要を作るのだ。ここでは物質的な豊かさが幸福感につながり、大衆の充足感と経済繁栄が直接的に合致する。こういった「幸福資本主義」とも呼べる消費者資本主義システムが、日本では 1960 年代に成立したのだ。

当時の日本人は、今よりはるかに広く行き渡った幸福感に満たされていた。物質的な豊かさは、確かに 40 年前の幸福の一因だった。その延長で、今日まだ、政府も企業も「市場原理」と「リストラ」により経済合理性を追求し続けている。ところが、そういった追及は「自由」や「安定」や「愛」や「崇高さ」といった大切な価値を犠牲にし、ひいては不幸をもたらすのだ。

現在の日本人の幸福感はどうだろうか。面白い統計がある。電通総研などによる世界価値観調査の 2000 年版を見ると、日本では「非常に幸せ」と「やや幸せ」を合計した 87% の人が幸せと答えている。これは世界中の多くの国とほぼ同じだ。ただし詳しく見れば、日本では「やや幸せ」が大部分で、「非常に幸せ」(28%) は 1995 年(33%) と比べても相当減った。「幸せでない」は少し増えている。「非常に幸せ」な人が突出して多い国は、メキシコ、ベネズエラ、プエルトリコ、ナイジェリア、タンザニアである。メキシコの GDP(国内総生産)は日本の 8 分の 1 程度、ナイジェリアは 100 分の 1 以下である。

こうしてみると、現在のメキシコやナイジェリアの人々が日本人よりずっと強い幸福感を広く共有している事実は、物質的な豊かさとは異なる幸福のかたちが存在することを意味し、「人間関係的」な幸福や「幸福感受性」とも言うべき次元の大切さを示唆する。このような人間的な次元は、戦後の経済合理性追求の中で「非合理的なもの」と考えられてきたが、反対に、経済合理性を超えた、真に全体的な合理性、いわば「幸福合理性」と考えることができるはずだ。

現在の消費資本主義は、環境破壊や資源の枯渇から、あと半世紀も持続できないという矛盾がある。だからといって自由な市場経済を否定する必要はない。人間の思い描く幸福のかたちには限りがなく、たとえば美しい絵画は、高価でも資源はほとんど浪費しない。そこでは資源の大量消費なしに、付加価値を通して、市場経済を持続しつつ「幸福」の無限空間を新しく開くこともできる。幸福のかたちに限りがないということは、消費資本主義の矛盾を解決する方法ともなるのだ。資源浪費も他者からの収奪もなしに持続する「幸福な社会」の可能性が、そこにある。

問 1 【A】の<sup>ふじわらしんや</sup>藤原新也さんと【B】の<sup>みた むねすけ</sup>見田宗介さんの記事に共通するメッセージについて、【A】と【B】、それぞれのアプローチを比較対照しながら、400 字程度で要約しなさい。

[20]

問 2 【A】の<sup>ふじわらしんや</sup>藤原新也さんか【B】の<sup>みた むねすけ</sup>見田宗介さんの記事に対して、新聞の読者欄に投稿する記事を書きなさい。その際、賛成か反対かはっきりと述べ、自分の経験や実例などを添えて説得力のある記事を 300 字程度で簡潔に書きなさい。

[20]

## パート2

問 次の3-7の空欄( )に入れるのもっとも適するものを、下のア-エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

3 予約するなら早い方がいいですよ。もう、あと2席( )残っていませんからね。

- |   |     |   |    |
|---|-----|---|----|
| ア | しか  | イ | だけ |
| ウ | ばかり | エ | ほど |

[1]

4 子供が明るく元気に育つのは、親( )一番うれしいことだ。

- |   |      |   |      |
|---|------|---|------|
| ア | によって | イ | にして  |
| ウ | にそって | エ | にとって |

[1]

5 病気で2ヶ月学校を休んだにも( )彼は期末試験で最高点を取った。

- |   |        |   |       |
|---|--------|---|-------|
| ア | 関わって   | イ | 関わろうと |
| ウ | 関わらないで | エ | 関わらず  |

[1]

6 社会の高齢化が進む( )老人介護の問題が深刻化する。

- |   |      |   |       |
|---|------|---|-------|
| ア | につけて | イ | につないで |
| ウ | につれて | エ | について  |

[1]

7 「ただ今、父は外出しております。よろしければ帰り次第、こちらから( )。

- |   |              |   |            |
|---|--------------|---|------------|
| ア | お電話なさいます     | イ | お電話してございます |
| ウ | お電話いたして下さいます | エ | お電話します     |

[1]

問 次の8－12の空欄( )に入れるのもっとも適するものを、下のア－エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

- 8 明日は遅れないように。ここを8時( )、出発しますからね。  
 ア しっかりと                      イ そっくりに  
 ウ きっかりに                      エ どっかりと
- [1]

- 9 長い努力の末、彼女は今や大統領の( )と呼ばれるほどになった。  
 ア 親指                                  イ 両手  
 ウ 左肩                                  エ 右腕
- [1]

- 10 彼はよほど自信があるのだろう。意気( )と出かけていった。  
 ア じょうじょう 上々                      イ そうそう 早々  
 ウ ようよう 揚々                      エ ごうごう 轟々
- [1]

- 11 お互いが相手の( )を考えれば、建設的な話し合いができるものだ。  
 ア 相場                                  イ 立場  
 ウ 足場                                  エ 持場
- [1]

- 12 議会解散を求める声で議会は( )となった。  
 ア 騒然                                  イ 健全  
 ウ 啞然                                  エ 自然
- [1]

問 次の 13–17 の下線で示された言葉について、それぞれの類義語を書きなさい。(例:安全—無事)

13 事態の解決は容易ではない。

14 あの会社にはいくら手紙を出してもまったく手応えがない。

15 複雑なプロジェクトを成功させるには綿密な計画が必要だ。

16 一生懸命勉強した甲斐あって彼女は望んだ大学に入学できた。

17 彼は誠実な人柄で、仲間からも信頼されている。

[5]

問 次の 18–22 の下線の単語の品詞名を下から選んで記号で答えなさい。

18 やっと 19 この 20 本 21 を 借りることができた。22 けれども、一週間以内に返却せねばならない。

ア	接続詞	イ	代名詞	ウ	動詞	エ	助動詞
オ	形容詞	カ	形容動詞	キ	副詞	ク	連体詞
ケ	助詞	コ	名詞				

[5]

**BLANK PAGE**

---

*Copyright Acknowledgements:*

Part 1 [A] © 16 August 2005, *The Asahi Shimbun*, Shinya Fujiwara.  
Part 2 [B] © 16 August 2005, *The Asahi Shimbun*, Munesuke Mita.

Permission to reproduce items where third-party owned material protected by copyright is included has been sought and cleared where possible. Every reasonable effort has been made by the publisher (UCLES) to trace copyright holders, but if any items requiring clearance have unwittingly been included, the publisher will be pleased to make amends at the earliest possible opportunity.

University of Cambridge International Examinations is part of the Cambridge Assessment Group. Cambridge Assessment is the brand name of University of Cambridge Local Examinations Syndicate (UCLES), which is itself a department of the University of Cambridge.